

(様式1)

令和5・6・7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(3年次)【小学校】

【学校名等】

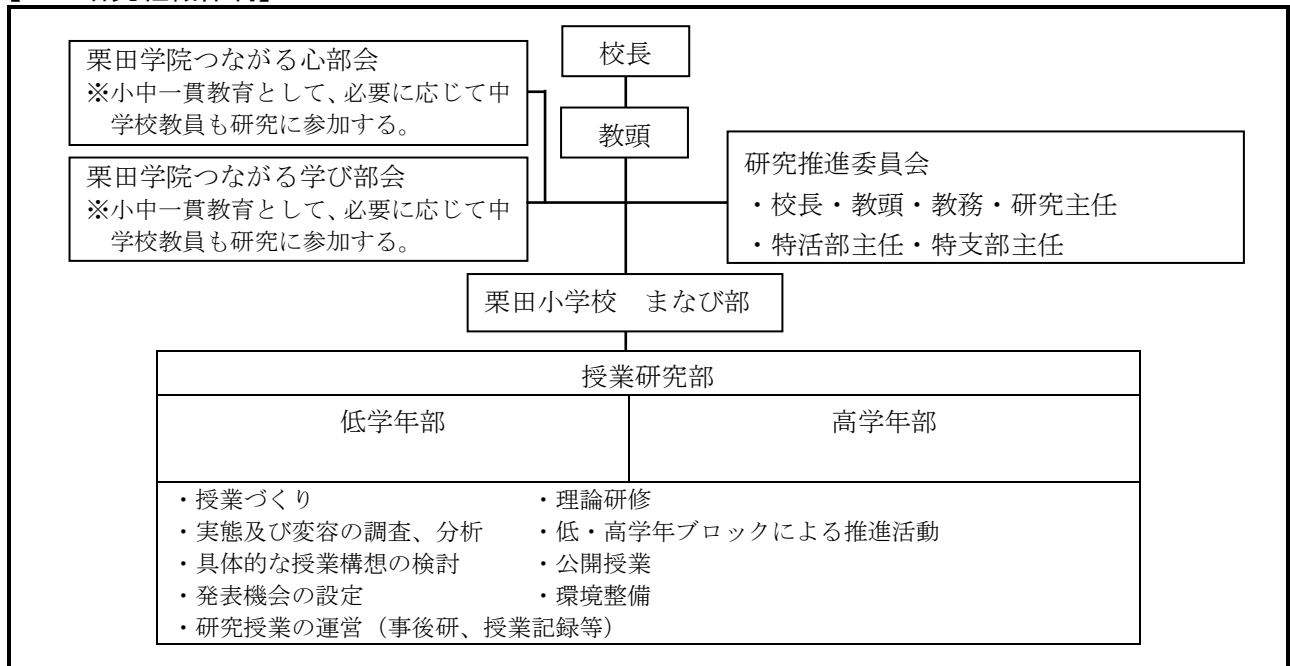
学校名		宮津市立栗田小学校						校長名	堀 宏安	
学 年		1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	6 0 名
学級数		1	1	1	1	1	1	1		
事業担当教員名		眞下 友紀								
① 中学校区で目指す子ども像		栗田学院（小中一貫校） 目指す子ども像 （１）夢の実現に向け 自ら学ぶ子ども （２）お互いが認め合える 心豊かな子ども （３）健康で元気に生活できる子ども （４）ふるさとを誇り 地域に貢献できる子ども								
② 目指す子ども像		学びとる児童 ～「自走・協力・挑戦」～ ・学ぶことの楽しさを見出し、自分が立てためあてに沿って学習した様子を振り返り、次につなげることができる児童（主体的に学び考える力） ・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解したり、友だちと合意形成を図ったり、課題を見出して解決策を考えたりすることができる児童（新たな価値を生み出す深い学び）								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題		<現状> 児童が単元の見通しをもち、自らの学びの構想を立てることで、主体性を高めることができ、学力の向上に繋がると考え、学習の工夫・改善に取り組んできた。また、学習内容を踏まえて児童自身がめあてを設定して学習に取り組み、めあてに対しての振り返りをし、次の学習に生かすという、児童が学びとる環境設定をしてきた。こうした学習改善の成果として、目標に向けて取り組む態度や、チャレンジ精神などの、非認知能力は高まってきていると考える。 <課題> 「対話力」については課題が残る。友だちの意見を聞いて自分の考えを深めたり、話し合いの中でよりよい解決策等を出したりする力はまだ十分とは言えない。すべての学習の土台となる基礎学力の向上や認知能力を高める必要がある。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説		○児童が単元の見通しをもち、自ら学びを構想することで、主体性が高まる。 ○自分の考えをもち発信したり、友だちと考えを交流したりして、自らの考えを再構築することで学びが深まり、学力向上につながる。  全ての教科・領域等で探究する力・活用する力・論理的に思考し表現する力・学びに向かう力の育成を図り「主体的・対話的で深い学び」の実現に努める。 児童の主体性をはぐくみ、対話力・認知能力の向上を目指し、児童に学びとる力を付ける。 話し合う機会を意図的に設定し、友だちの話を聞くことや、話し合うことで自分の考えがまとまったり、深まったりする良さや楽しさを児童が感じ取れるようにする。 児童一人一人の成長やつまづき等の理解に努め、個々の興味・関心・意欲（「分きたい」「できるようになりたい」「もっと学びたい」等）の『～したい』を踏まえた授業改善を図る。 認知能力・非認知能力の一体的な育成を図ることや、児童が自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整できるよう、全ての学習活動において工夫・改善する。								

令和7年5月1日現在

【1 研究主題】

「主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究」
～子どもが学びとる学習づくりを目指して～

【2 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

子どもが学びとる授業の実践・研究

- ① 個々の児童がどう学んだかという視点で公開学習を参観し、児童の学びがどうであったか、そのための手立てはどうだったかを振り返り、その後の指導に生かす。
- ② 児童が自ら課題を見つけ、その課題を自ら解決する力を付けるために、課題解決型の学習方法等を取り入れる。
- ③ 自分の学習を調整する力を付けるために、自由進度学習や反転学習等、いろいろな学習方法に挑戦する。
- ④ 児童が学習の見通しをもつために、児童自らがめあてを立てたり、学習を振り返ったりする。
- ⑤ 振り返りの質を向上させるために、児童間での振り返りの交流や、教員間での、実践を踏まえた振り返りの変容を交流する場を設ける。
- ⑥ 話すことによるアウトプットの機会を意識して作っていく。
- ⑦ 学びのサイクルを確立させられるように予習学習等に取り組み、子どもたちが見通しをもち、学びたい思いやめあてをもって学習に向かえるようにする。
- ⑧ 家庭学習において学びの内容や方法を工夫し、自ら計画を立て取り組む。
- ⑨ スキルタイムを基礎学力の定着を図る時間とする。
- ⑩ 「学びの土台」「学びの方法」（学びのパスポートと同じ観点）を提示し、教師、児童がその観点を小中通して意識しながら学習が進められるようにする。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
456	46	まわりが反対しても、自分ができると思ったらやってみる。	目標に向けて取り組む姿勢	
456	73	授業で新しく学習したことをこれまで学習したことと結びつけて理解したり、話合いで活かしたりしている。	精緻化	
456	74	ほかの教科の授業で学んだことであっても、教科に関係なく授業中の活動で活かしている。	精緻化	
456	79、85	国語（算数）の授業では、自分の思いや考えをもとに答えを見つけ出すような課題に取り組む機会がある。	主対深	
456	80、86	国語（算数）の授業では、授業の最後に自分自身の学習内容を振り返り、学習目標（学習のめあて）が達成できたかどうかを考える機会がある。	主対深	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

1	分析結果から明らかになった重点課題
(1)	主体性や挑戦意欲（非認知能力）は一定程度育っている。一方で、①対話が「意見交流」にとどまり、考えの深化・再構築に至っていない。②学びが教科横断的に十分につながっていない。③学力（認知能力）の伸びに個人差・学年差がある。よって、「主体的に学ぶ姿勢を、知識・技能の定着・活用につなげる指導改善」が必要である。
2	教師の指導力向上に向けた具体的な手立て（授業改善） ◇単元構想を軸にした授業づくり - 単元のゴール（身に付けさせたい学力）を明確にした単元構想を作成 「何のために学ぶのか」「何ができるようになるのか」を児童と共有 - 単元を通して課題提示 → 探究 → 対話 → 振り返りの流れを意識した授業設計を行う (1) 対話の「量」から「質」への転換 - 話合いの目的・ゴールを明確に提示 - 単なる意見交換ではなく、友だちの考えを根拠に自分の考えを修正したり、共通点・相違点を基に考えをまとめ直したりするといった思考を伴う対話を重視 - 教師はファシリテーターとして、発問や問い返しで思考を深める。 (2) 振り返りの質の向上 - 振り返りの視点を明確にする。 (例：何が分かったか/どう考えが変わったか/次に生かせること) - 単元途中・単元末の振り返りを位置付け、学びの自覚化を図る。 - 教師間で振り返りの記述例や評価の視点を共有する。
3	個に応じた具体的な指導・支援方法（個別最適な学び） (1) 学力・学習状況の把握に基づく支援 - 各種調査結果を基に、児童一人一人の認知能力・学び方の実態を把握 6年：全国学力・学習状況調査 4～6年：京都府学力・学習状況調査（学びのパスポート） 2・3・5年：総合学力調査（ベネッセ） - 昨年度からの変容も踏まえ、継続的に分析する。 (2) 学び方に応じた支援 - 学力ステップが低位の児童 → 学習の進め方を具体的に示し、個に応じた指導の手立てを行い、成功体験を積ませる。 (3) 学力ステップが中・高位の児童 → 発展課題や説明活動を通して、思考の整理や論理的な表現方法等の学びの深化を図る。 (4) 自由進度学習や選択課題を取り入れ、学習方法の自己選択・自己決定を支援

- (5) 「学びのパスポート」を生かした個別支援
 - ・結果を基に、主体性、精緻化、対話力 それぞれの強み・課題を把握
- (6) 振り返りシートを活用し、自ら課題を設定 → 学習 → 振り返り → 次につなげる学習サイクルを定着させる

4 集団としての具体的な指導・支援方法（協働的な学び）

- (1) 主体的に学び取る力を育てる指導
 - ・学習内容・学習方法を自己選択できる場面を設定
 - 教師は選択肢を精選し、学習環境を整備
 - ・めあて・振り返りの交流を通して、考えの広がりや深まりを実感させる。
- (2) 学習意欲を高める環境づくり
 - ・「できた」という表層理解にとどめず、「分かった」という概念（意味）理解を実感できる仕掛けづくり
 - ・相互評価を通して、努力や成長を認め合い・課題の克服に迫る学級風土の醸成
 - ・挑戦を肯定的に受け止める雰囲気づくり

【8 仮説の修正】

当初の仮説では、「子どもが単元の見通しをもち、自ら学びを構想することで主体性が高まり、自分の考えを発信したり、友だちと交流したりすることを通して学びが深まり、学力向上につながる」と考え、主体的・対話的な学習場面の設定を重視して実践を行ってきた。

その結果、学びに向かう姿勢や挑戦意欲といった非認知能力の面では一定の成果が見られ、子どもたちは目標を意識して学習に取り組もうとする姿を見せるようになった。一方で、学びのパスポートの結果や学力調査の分析からは、認知能力（学力）の向上については、十分な伸びが見られない学年・児童が存在することが明らかになった。

このことから、「主体性や対話の機会を設定するだけでは、必ずしも学びが深まり、知識・技能の定着や活用につながるとは限らない」という課題が見えてきた。

特に、①対話が意見の交流にとどまり、考えの再構築まで至っていないこと②単元全体の構造や、身に付けさせたい学力が児童に十分に意識化されていないことが、認知能力の向上を妨げる要因であると考えられる。

そこで仮説を次のように修正する。

単元で教えるべき内容や身に付けさせたい知識・技能、児童の実態を踏まえて単元計画を立て、明確な単元構想のもとで学習を進めることで、子どもたちは学びの目的や意味を理解しながら主体的に学びを進めることができる。その過程で、対話を通して考えを深めたり、学びをつなげたりする経験を積むことで、認知能力（学力）の定着・向上につながっていくと考える。現段階では、認知能力の大きな向上は十分には見られていないが、①単元構想を明確にした授業づくり②対話の質を高めるための意図的な支援③振り返りを通した学びの自覚化といった取組を今後も継続・改善していくことで、主体性と学力が相互に高まる学びを実現していきたい。

【9 具体的な取組内容の修正】

子どもが学び取る授業の実践・研究

- ・いくつかの単元において、単元構想に基づいた学習シートを活用し、児童が学習の見通しをもって学びを進められるようにした。学習シートには、単元のゴール、学習の進め方の選択肢、振り返りの視点を明示し、児童が自ら学習を調整できるよう工夫した。
- ・学習シートに中間地点の振り返りを位置付け、学習の途中で自分の理解度や学び方を確認し、必要に応じて学習方法を修正する機会を設定した。これにより、学びを一方向で終わらせるのではなく、振り返りを生かして次の学習につなげる「学びのサイクル」を意識させた。
- ・対話力の向上を目指し、話合いの目的やゴールを明確にした対話場面を意図的に設定した。単なる意見交流に終わらず、友だちの考えを聞いて自分の考えを深めたり、再構築したりすることを重視した。
- ・家庭学習においても、予習学習や振り返りを取り入れ、学校での学びと家庭学習がつながるような取組を行った。自ら計画を立てて学習に取り組む経験を積ませることで、主体的に学ぶ態度の定着を図った。

【10 児童の変容（普段の様子から）】

- ・単元のゴールや学習の見通しを共有することで、児童が目的意識をもって学習に取り組む姿が見られるようになった。学習のはじめに「今日は何をするのか」「何ができるようになるのか」を意識しながら学びを進める児童が増えた。
- ・自ら予習学習に取り組んだり、学習方法を選択したりするなど、主体的に学びを進めようとする姿勢が育ってきた。特に、これまで受け身になりがちであった児童も、学習シートを手がかりに自分なりの学び方を模索する様子が見られた。
- ・単元途中での振り返りを通して、自分の学びを客観的に捉えようとする姿が見られるようになった。中間地点の自分と単元終了時の自分を比べることで、理解の深まりや成長に気付き、自己肯定感の向上につながった。
- ・対話的な学習場面では、友だちの考えを聞こうとする姿勢が育ち、話合いに参加しようとする児童が増加した。一方で、対話を通して考えをさらに深める段階には個人差があり、今後も継続的な支援が必要である。
- ・教師自身が「挑戦する姿」「学び続ける姿」を示したことで、児童の中にも「やってみたい」「もっと学びたい」という前向きな意識が広がり、学習に向かう学級全体の雰囲気が高まったと感じられる。

【11 次年度の研究構想】

- ・次年度は、これまでの実践を踏まえ、より質の高い単元構想の充実を図る。児童の「やってみたい」「知りたい」という思いを起点にしながら、単元のゴールをどのように設定するか、また、付けなければならない学力（知識・技能、思考力・判断力・表現力）を明確にした上で、教材研究を丁寧に行う。
- ・主体的・対話的で深い学びを実現するために、対話の質（論理的な思考力・表現力）の向上を重点課題とする。話合いの目的や役割を明確にし、対話を通して考えを深めたり、学びをつなげたりする力の育成を目指す。
- ・学びのパスポートの結果を継続的に分析し、児童一人一人の変容を捉えながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。
- ・教師自身が新たな授業改善や実践に挑戦し、学び続ける姿勢を大切にすることで、その姿を児童に示していく。教師の学ぶ姿が児童の主体的な学びを引き出す原動力となることを意識し、校内研究を推進していきたい。
- ・スキルタイムでコミュニケーションスキル（ことばの力・語彙力・表現力）を培っていく。